

[B年] 三位一体主日(2023年6月4日)

【旧約聖書日課】

出エジプト記 19章3~8節、16~20節

3モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。

「ヤコブの家にこのように語りイスラエルの人々に告げなさい。

4 あなたたちは見た

わたしがエジプト人にしたこと  
また、あなたたちを驚の翼に乗せて  
わたしのものに連れて来たことを。

5 今、もしわたしの声に聞き従い

わたしの契約を守るならば  
あなたたちはすべての民の間にあって  
わたしの宝となる。  
世界はすべてわたしのものである。

6 あなたたちは、わたしにとって

祭司の王国、聖なる国民となる。  
これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

7モーセは戻って、民の長老たちを呼び集め、主が命じられた言葉をすべて彼らの前で語った。8民は皆、一斉に答えて、「わたしたちは、主が語られたことをすべて、行います」と言った。

16三日目の朝になると、雷鳴と稲妻と厚い雲が山に臨み、角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。17しかし、モーセが民を神に会わせるために宿営から連れ出したので、彼らは山のふもとに立った。18シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。19角笛の音がますます鋭く鳴り響いたとき、モーセが語りかけると、神は雷鳴をもって答えられた。20主はシナイ山の頂に降り、モーセを山の頂に呼び寄せられたので、モーセは登って行った。

【使徒書日課】

使徒言行録 2章(14~21) 22~36節

14すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。15今は朝の九時です。ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません。16そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。」

17 『神は言われる。

終わりの時に、  
わたしの霊をすべての人に注ぐ。  
すると、あなたたちの息子と娘は預言し、  
若者は幻を見、老人は夢を見る。

18 わたしの僕やはしたためにも、

そのときには、わたしの霊を注ぐ。  
すると、彼らは預言する。

19 上では、天に不思議な業を、

下では、地に徴を示そう。  
血と火と立ちこめる煙が、それだ。

20 主の偉大な輝かしい日が来る前に、

太陽は暗くなり、  
月は血のように赤くなる。

21 主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

22イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知

っているとおりです。23このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまっただけです。24しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。25ダビデは、イエスについてこう言っています。

『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。

主がわたしの右におられるので、

わたしは決して動揺しない。

26 だから、わたしの心は楽しみ、

舌は喜びたてる。

体も希望のうちに生きるであろう。

27 あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、

あなたの聖なる者を

朽ち果てるままにしておられない。

28 あなたは、命に至る道をわたしに示し、

御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

29兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあり、はっきり言えます。30ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。31そして、キリストの復活について前もって知り、

『彼は陰府に捨てておかれず、

その体は朽ち果てることがない』

と語りました。32神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。33それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。34ダビデは天に昇りませんでした。35が、彼自身こう言っています。

『主は、わたしの主にお告げになった。

『わたしの右の座に着け。

35 わたしがあなたの敵を

あなたの足台とするときまで。』

36だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです。』

【福音書日課】

ルカによる福音書 10章17~24節

17七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」18イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。19蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ權威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。20しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

21そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。22すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかに、たれもいません。」23それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたの見えるものを見る目は幸いだ。24言うておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たものが、見ることができず、あなたがたが聞いていたものを聞きかたがた、聞けなかつたのである。』

## 『聖書協会共同訳』（2018年版）読み比べ

## 【旧約聖書日課】出エジプト記19章3～8、16～20節

<sup>3</sup>さて、モーセが神のもとに登って行くと、主が山から呼びかけられた。「ヤコブの家に言い、イスラエルの人々にこのように告げなさい。<sup>4</sup>『私がエジプト人にしたことと、あなたがたを驚の翼に乗せ、私のもとに連れて来たことをあなたがたは翼に翼に。』<sup>5</sup>それゆえ、今もし私の声に聞き従い、私の契約を守るならば、あなたがたはあらゆる民にまさって私の宝となる。全地は私のものだからである。<sup>6</sup>そしてあなたがたは、私にとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。』<sup>7</sup>そこでモーセは戻り、民の長老たちを呼び寄せ、主が命じられたこれらの言葉をすべて彼らの前で語った。<sup>8</sup>すると民は皆、口をそろえて答えた。「私たちは、主が語られたことをすべて行います。」そこでモーセは主に民の言葉を持ち帰って伝えた。

<sup>16</sup>三日目の朝になると、雷鳴と稲妻と厚い雲が山に臨み、角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。<sup>17</sup>しかし、モーセが民を神に会わせるために宿営から連れ出したので、彼らは山のふもとに立った。<sup>18</sup>シナイ山は金山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。<sup>19</sup>角笛の音がますます鋭く鳴り響いたとき、モーセが語りかけると、神は雷鳴をもって答えられた。

<sup>20</sup>主はシナイ山の頂に降り、モーセを山の頂に呼び寄せられたので、モーセは登って行った。

## 【使徒書日課】使徒言行録 2章(14～21) 22～36節

<sup>14</sup>そこで、ペトロが十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。私の言葉に耳を傾けてください。<sup>15</sup>今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているものではありません。<sup>16</sup>そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。

<sup>17</sup>『神は言われる。

終わりの日に

私は、すべての肉なる者にわが霊を注ぐ。

あなたがたの息子と娘は預言し

若者は幻を見、老人は夢を見る。

<sup>18</sup>その日、男女の奴隷にも

わが霊を注ぐ。

すると、彼らは預言する。

<sup>19</sup>上では、天に不思議な業を

下では、地にしるしを示す。

血と火と立ち上る煙が、それだ。

<sup>20</sup>主の大きいなる輝かしい日が来る前に

太陽は闇に

月は血に変わる。

<sup>21</sup>しかし、主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

<sup>22</sup>イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、この方を通してあなたがたの間で行われた奇跡と不思議な業としたことによって、そのことをあなたがたに示されました。あなたがた自身が承知のとおりです。<sup>23</sup>このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手によ

って、はりつけにして殺したのです。<sup>24</sup>しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。<sup>25</sup>ダビデは、イエスについてこう言っています。

『私は、絶えず目の前に主を見ていた。

主が私の右におられるので

私は揺らぐことがない。

<sup>26</sup>それゆえ、私の心は喜び、

私の舌は喜び踊った。

私の肉体もまた希望のうちに安らう。

<sup>27</sup>あなたは私の魂を陰府に捨て置かず

あなたの聖なる者を朽ち果てさせない。

<sup>28</sup>あなたは、命の道を私に示し、

御前にいる私を喜びで満たしてください。』

<sup>29</sup>きょうだいたち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあると、はっきり言えます。<sup>30</sup>ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人を王座に着かせると、神が堅く誓ってくださったことを知っていました。<sup>31</sup>そして、キリストの復活について予見して、

『彼は陰府に捨て置かれず、

その肉体は朽ち果てなかった』

と語りました。<sup>32</sup>神はこのイエスを復活させられたのです。私たちは皆、そのことの証人です。<sup>33</sup>それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。<sup>34</sup>ダビデが天に昇ったわけではありません。彼自身こう言っています。

『主は、私の主に告げられた。

「私の右に座れ。

<sup>35</sup>私があなたの敵を

あなたの足台とするときまで。」』

<sup>36</sup>だから、イスラエルの家はみな、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけこのたイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです。」

## 【福音書日課】ルカによる福音書 10章17～24節

<sup>17</sup>七十二人は喜んで帰って来て、言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに屈服します。』  
<sup>18</sup>イエスは言われた。「私は、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。<sup>19</sup>蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ權威を、私はあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。  
<sup>20</sup>しかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。』

<sup>21</sup>その時、イエスは聖霊によって喜びに溢れて言われた。「天地の主である父よ、あなたがたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちにお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。<sup>22</sup>すべてのことは、父から私に任せられています。父のほかに、子が誰であるかを知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかに、父が誰であるかを知る者はいません。」<sup>23</sup>それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ。<sup>24</sup>言っておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・6月4日「三位一体主日」の日課主題は「教会の使信」。「聖霊降臨日(ペンテコステ)」に続く日曜日は、14世紀以降、西方教会で「三位一体主日」と定められてきた。「三位一体」は、ローマ帝国下キリスト教を公認した皇帝コンスタンティヌス大帝の命により後325年に招集された「ニカイア会議」で採択された「ニカイア信条」で初めて定式化された正統教理で、長らく主流の東西教会で「正統と異端」を峻別する基準とされてきたが、ギリシア正教会系ではない古い伝統を保持する東方教会の中には「ニカイア信条」を認めない教会が存在する。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、「シナイ契約」の場面情景を描く箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、五旬祭の日に聖霊降臨を経験した使徒たちが祭りに集まる人々に向けて始めた最初の宣教の使信を伝える箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、宣教に派遣された七十二人の弟子たちの報告を受けた主イエスの反応を伝える箇所。

**旧約日課(出エジプト 19章より)**

・「出エジプト記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第二に置かれ、「申命記」まで4巻にわたって展開される「モーセ物語」の第一巻を構成する。「モーセ物語」は、正典「律法と預言者」の提示する「神の民イスラエル共同体」の基礎を為す物語として位置づけられる。この「共同体」の基礎付けとなるのが、日課箇所を含む本書19～24章で提示される「シナイ契約」である。この「シナイ契約」の対象となるのは、モーセによってエジプトから連れ出されてきた「民」であるが、そこには民族血統上の「イスラエル(ヤコブの子孫)」だけが含まれるのではなく、「種々雑多な人々」(出12:38)が加えられることが明示されている。「旧約」全体においては、「神の民イスラエル」を「ユダヤ民族共同体」として基礎づける立場と、「契約共同体」として基礎づける立場の両論が混在している。歴史的に見れば、バビロン捕囚期(前6世紀)以後に「正典」編纂などによって枠組みが成立した「ユダヤ教共同体」の「神の民イスラエル」観は、「ユダヤ民族共同体」の立場から出発しながら、「契約共同体」を指向して発展してきたとみることができる。この指向性ゆえに派生してきたのが、キリスト教共同体やイスラム共同体である。

・「モーセ物語」において「神の山」とも呼ばれる山(ホレブ山≡シナイ山)の位置づけは特別であり、モーセと「主と呼ばれる神」を結びつける聖地として扱われる。しかし、「モーセ物語」中でこの「山」の場面は、「モーセ召命伝承」と「シナイ契約伝承」に限られており、これ以後の「荒野時代」には、「会見の幕屋」が「山」の代替物として位置づけられることになる。「山岳信仰の平地化」とも言える展開は、「モーセ」のもたらした宗教の歴史を反映していると考えられる。

**使徒書日課(使徒言行録 2章より)**

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻で「初代教会正史」を物語る。資料「聖書と祈りの会 230517」を参照。日課箇所は、使徒たちの教会が「聖霊降臨」によって宣教を開始した当初、ペトロが五旬祭(七週祭)のために来訪してきていた人々に向けて語ったという演説を伝える。「使徒言行録」は、使徒らの演説(説教)が長文で多く収録されているが、その活動初期に彼らの演説などが逐一記録されていたとは考えられず、教会共同体における伝承過程で定式化された演説伝承を文字起こししたものが採録されていると考えられる。つまり、これらの演説は、物語構成上は個々の登場人物に帰されるが、その内容を演者個人の信仰や信念に結び付けて解釈することは適当ではなく、教会共同体の信仰告白として解釈されるべきである。

・日課箇所中には、「旧約」からの引用が繰り返されている。17～21節は「ヨエル書」3:1～5から、25～28節は「詩編」16:8～11から、30節は「詩編」132:11から、31節は「詩編」16:10から、34～35節は「詩編」110:1から引用と考えられる。

・ペトロに帰される演説(説教)は、多くの旧約引用にもかかわらず、「イエス」についての主張に徹している(7章の「ステファノの説教」が旧約の物語る歴史と人物を総説するのとは大きく異なる)。ここで特徴的なのは、「あなたがた(人)は〇〇したが、神はイエスを〇〇した」という言い回しが繰り返されていることで、一貫して「イエス」を主体にして語られることはない。このように、人間の側の主導欲求にもかかわらず、常に神が最終的な主導権を握られ、「イエス」をも神に対して従属的な立場で描くのは、「ルカ文書」の特徴である。このような「神中心主義」の立場に徹することによって、「ルカ文書」は、「イエスの役割を継承する弟子たちの教会共同体」という教会論を提示しようとしている。

**福音書日課(ルカ 10章より)**

・日課箇所は、宣教活動に派遣された72人の弟子たちが戻り活動報告したのを受けて主イエスが述べられた言葉で、前半(17～20節)は「ルカ」だけが伝えている内容であるのに対して、後半(21～24節)は「マタイ」が異なる文脈で並行記事を伝えている。この後半部分は21～22節と23～24節に区分できるが、「マタイ」は21～22節に相当する句を、「ルカ」が日課箇所の直前に置いている「悔い改めない町を叱る」(13～16節)に続く句として置いている。つまり、本来、21～22節は13～16節に続く句として伝承されていたが、「ルカ」がその中途に17～20節を割り込ませたと考えられる。「悔い改めない町を叱る」(13～16節)の伝承句は、弟子たちの宣教派遣に際してその困難を強調するために導入されたものだろう。また、23～24節に相当する句は、「マタイ」も「種をまく人のたとえ」の一連の伝承の中に置いており、元来「宣教」に関する主イエスの言及として伝えられていたことが明らかであるが、「ル

カ」はこれを「弟子たちの宣教」とも結びつけることを意図してここに置いたものと考えられる。

・「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)は、共通して「十二人」の弟子たちを宣教に派遣したことを伝えている(マタイ 10:1~15、マルコ 6:7~13、ルカ 9:1~6)。しかし、「七十二人」の弟子たちを派遣したという伝承は、「ルカ」だけが伝える。主イエスが公生涯の旅程の中で弟子たちをご自分の元から派遣して宣教活動に従事させるということがどれほど行われたのか詳細は不明であるが、「十二人」にそのような自覚があったことは確かなのだろう。それは、主イエスの死と復活後の「使徒たちの教会」が「主イエスを継承する宣教共同体」であることの根拠にもなったはずである。「ルカ」は、これを段階的に展開したこととして「ルカ文書」全体で取り上げようとしていると考えられる。すなわち、「ルカ福音書」と「使徒言行録」を通して、主イエスが一人で開始された宣教活動(ルカ 4 章)は、段階的に弟子たちに移譲され、主イエスの昇天・聖霊降臨を機に弟子たちの手に完全に託され、教会の営みを通して次々に宣教活動の担い手は拡大していくものとして描かれていくのである。

・20 節「あなたの名」は、「ルカ文書」においては特異的な用例。「ルカ文書」で「名」は、もっぱら「主イエス・キリストの名」に関連して用いられている。ここでの例外的な用例は、「ルカ福音書」独自の伝承句である点からも、「ルカ」の明確な意図を読み取ることができる。つまり、弟子たちは主イエスから「宣教」を受け継ぐことを通して主イエス同様にその「名」が記念されることになる。「ルカ」は構想していると考えられ、聖霊降臨後の弟子たちの教会描写に向けた伏線となっている。

### 来週の誕生日 (6月4日~10日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

・21-351 番「聖なる聖なる」(=□12 番、□66 番)は、19 世紀初頭に英国教会司祭として詩作に活躍した R・ヒーバーが「三位一体主日」のために作詞。曲は、この歌詞のために 19 世紀に教会音楽家として活躍した英国教会司祭 J・B・ダイクが作曲し、「NICAEA (ニケア)」の曲名が付されている。

・21-509 番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966 年夏の異常な猛暑の中で着想された。

・21-524 番「われらみ名により」は、20 世紀初頭の英国で指導的な立場にあった讃美歌作家ディアマー作詞の聖餐讃美歌。曲は、20 世紀前半に米国で活躍した音楽家フリーデルがこの詞のために作曲。

・21-90 番「主よ、来たり、祝したまえ」は、1988 年、いまだ東西に分断されていたドイツの教会で、東西統一を願い求める中で作られ、歌われた讃美歌。作詞作曲は、ドイツ南部ヘッセンの牧師 D・トラウトヴァインで、讃美歌を通じて礼拝改革やエキュメニカル運動を推進した一人。

#### 21-351「聖なる聖なる」

### Holy, Holy, Holy, Lord God Almighty

1. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / Early in the morning our song shall rise to thee. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity!
2. Holy, holy, holy! All the saints adore thee, / casting down their golden crowns around the glassy sea; / cherubim and seraphim falling down before thee, / which wert, and art, and evermore shalt be.
3. Holy, holy, holy! Though the darkness hide thee, / though the eye of sinful man thy glory may not see, / only thou art holy; there is none beside thee, / perfect in power, in love and purity.
4. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / All thy works shall praise thy name, in earth and sky and sea. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity.

#### 21-509「光の子になるため」

### I want to walk as a child of the light

1. I want to walk as a child of the light; / I want to follow Jesus. / God set the stars to give light to the world; / The star of my life is Jesus.
- [Refrain] In him there is no darkness at all; / The night and the day are both alike. / The Lamb is the light of the city of God; / Shine in my heart, Lord Jesus.
2. I want to see the brightness of God; / I want to look at Jesus. / Clear Sun of righteousness, shine on my path, / And show me the way to the Father.
  3. I'm looking for the coming of Christ; / I want to be with Jesus. / When we have run with patience the race, / We shall know the joy of Jesus.

#### 21-524「われらみ名により」

### Draw Us in the Spirit's Tether

1. Draw us in the Spirit's tether, / For when humbly in Thy name, / Two or three are met together / Thou are in the midst of them; / Alleluia! Alleluia! / Touch we now Thy garment's hem.
2. As the brethren used to gather / In the name of Christ to sup, / Then with thanks to God the Father / Break the bread and bless the cup, / Alleluia! Alleluia! / So knit Thou our friendship up.
3. All our meals and all our living / Make as sacraments of Thee, / That by caring, helping, giving / We may true disciples be. / Alleluia! Alleluia! / We will serve Thee faithfully.

#### 21-90「主よ、来たり、祝したまえ」

### Komm, Herr, Segne uns

1. Komm, Herr, segne uns, daß wir uns nicht trennen, / sondern überall uns zu dir bekennen. / Nie sind wir allein, stets sind wir die Deinen. / Lachen oder Weinen wird gesegnet sein.
2. Keiner kann allein Segen sich bewahren. / Weil du reichlich gibst, müssen wir nicht sparen. / Segen kann gedeihn, wo wir alles teilen, / schlimmen Schaden heilen, lieben und verzeihn.
3. Frieden gabst du schon, Frieden muß noch werden, / wie du ihn versprichst uns zum Wohl auf Erden. / Hilf, daß wir ihn tun, wo wir ihn erspähen - / die mit Tränen säen, werden in ihm ruhn.
4. Komm, Herr, segne uns, daß wir uns nicht trennen, / sondern überall uns zu dir bekennen. / Nie sind wir allein, stets sind wir die Deinen. / Lachen oder Weinen wird gesegnet sein.